

ホロコースト の 力学

独ソ戦・世界大戦・
総力戦の弁証法

H O L O C A U S T

永岑三千輝

Nagamine Michiteru

序——問題の限定

本書にまとめることになった一連の論文を書く直接的契機となったのは、一九九五年一月に発生した「マルコポーロ」事件である。阪神大震災とオウム真理教事件で騒然とした状況で、二月号に「ナチ・ガス室はなかった」と称するいわゆる「アウシュヴィッツ否定論」の記事が月刊誌「マルコポーロ」に掲載された。それは、ネオナチや極右勢力・人種主義勢力の世界的動向を知らず、政治の世界の激しい対立状況に無頓着な人が引っかけ、それに商業雑誌のセンセーショナルリズムが結びついた結果であった。戦後史最大のタブーを覆すと豪語する記事はすぐさま内外の批判を浴び、掲載した雑誌は廃刊に追い込まれた。しかし、慌てふためいた雑誌廃刊によってまともな議論が展開されなかつたことは、多くの人々に違和感を残した。学生や市民の中から「いったいどうなっているのか」といった疑問が出された。

しかし、「アウシュヴィッツ否定論」は欧米のネオナチ、極右の政治プロパガンダとして長い歴史があった。それに対しては欧米の歴史家が適宜批判を加えてきた。これらを踏まえて私は、アウシュヴィッツのガス室を否定する宣伝の特徴、ホロコースト否定論とその批判に関する研究の到達点についてセミナーで報告し、ドイツ現代史研究の立場から「戦争責任研究」や「現代史研究」などにいくつかの論文を発表して、ホロコーストを第三帝国の戦争政策の中に位置づけた。⁽¹⁾

早くも九五五年の終わりには、「アウシュヴィッツ否定論」に対する科学的批判の代表的な仕事であるデボラ・E・リップシュタットの本が邦訳された。⁽²⁾「マルコポーロ」に登場した議論が欧米のネオナチ・人種主義者の似非科学的

Dynamics of the Holocaust:
Dialectics of the German-Soviet War, World War and Total War

by NAGAMINE Michiteru
AOKI-SHOTEN Publishing Co., Ltd.

ISBN4-250-20326-3

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

議論の紹介にすぎないことはここからも明らかだった。また、アウシュヴィッツのガス室とその稼動状態の検証に関しては、九七年に栗原優著「ナチズムとユダヤ人絶滅政策——ホロコーストの起源と実態」(ミネルヴァ書房)が刊行された。否定論者のガス室否定の議論を批判するためには基本的にはこの本、とくにその第二部で十分であろう。

歴史科学にとっての問題はむしろ、欧米の論争史を踏まえて、ヒトラーによるユダヤ人「絶滅命令」の時期・事実関係と論理をどのように把握するかということであった。この点では本書で詳しく述べるように、四一年八月前半説から四一年一二月説の間で議論が分かれている。時期と論理に関して多様な史料と議論があり、現在でもその議論は続いている。ヒトラーのユダヤ人「絶滅命令」なるものがいつ出されたのかについての検証は、いまや相対的に項末な問題だとして片づけられるものではない。少なくとも欧米で研究の最先端を走る多くの研究者は、ブラウニングの言うように、「最終解決」に関するヒトラーの「根本的決定」(ゲルラッハ)の性格とその時点の究明に折りに触れて立ち返り、これまで同様に熱心にとりこんでいる。⁽³⁾

本書は、この「根本的決定」の時期をめぐる欧米と日本の議論を私なりに整理し、拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 一九四一—一九四二』(同文館、一九九四年)で打ち出した四一年一二月説を検証しようとするものである。⁽⁴⁾

その方法的立場は、本書のタイトルが示すように、ホロコーストを独ソ戦から世界戦争への展開の中でとらえ、総力戦下の多元的な要因・力・勢力・ベクトルのぶつかり合いの結果としてとらえようとする。その方法を一言で表現する概念として弁証法を用いている。具体的には、諸主体・諸勢力の立体的な闘争的諸関係の総体とその推移において歴史現象を見ていこうとするものである。⁽⁵⁾ホロコーストについても、第一次世界大戦の帰結とその記憶を踏まえた第二次世界大戦の場で、敵対的諸勢力の闘争的諸関係の総体がどのようなものであり、どのように動態的に変化していくかについて、つねに留意しつつ個別事象を見ていこうという方法的な見地である。第一次世界大戦は一九一八年の十一月革命・内部崩壊で終わった。その回避・克服がヒトラー、ヒムラーの課題であった。ドイツ第三帝国の戦争

体制の内部崩壊を何としてもさけて総力戦に勝利しようとするヒトラー、ヒムラー、ナチ権力機構の意識構造との関連でホロコーストの展開を見るといこうである。

個々の論点との関連で言えば、第一には、ホロコースト政策の決定において食糧不足・食糧危機と労働力不足が決定的要因だと見る説に対して、むしろ総体的な権力状況、戦局の決定的重要性を再確認したい。四一年八月以降顕著になるソ連ユダヤ人の無差別大量殺害への移行は、その前にヒトラーの大々的な絶滅命令が出たからではない。それは、ソ連側の前線と後方における抵抗・反撃の高まりの中で、治安秩序確立に任務を負うヒムラーと帝国保安本部の直面した独ソ戦の現場の論理から解きほぐすことが可能であるということである。

第二に、そのことと関連して、ソ連ユダヤ人の運命とポーランド・ユダヤ人やドイツ、オーストリア、西部占領地など西欧ユダヤ人の運命は段階的にも論理的にも区別すべきだということである。ポーランドやドイツ本国、西欧占領地のユダヤ人の移送政策から絶滅政策への転換は、四一年一〇月以降に選びとられたことであった。九月下旬に一時的回避策として移送政策が再開されるが、対ソ戦での第三帝国の危機の深刻化が暫定的な移送政策さえも挫折させることになる。そこにさらに軍事同盟国日本の真珠湾攻撃に伴うヒトラーの対米宣戦布告が加わり、第三帝国は東西で巨大な敵に直面することとなった。これがポーランドやドイツ、西欧占領地のユダヤ人の運命を基本的に決定したと見る。

第三に、ホロコーストの展開をユダヤ人憎悪や反ユダヤ主義の観念との関係においてではなく、ドイツ占領下のパルチザンなど反ドイツ勢力の強大化と関連づけて見ていく。しかし、それはなにも「パルチザン対策としてのユダヤ人絶滅政策」という狭い単純な枠組みでホロコーストを把握しようというのではない。前線後方地域、あるいはポーランド総督府、白ロシア、ウクライナなどにおけるパルチザンの勢力拡大と闘争の激化、バルカンにおけるパルチザンの活性化は、ソ連赤軍とドイツ国防軍など正規軍同士の巨大なぶつかり合いの力学・総力戦がある場合に、ドイツ軍の背後の安全にとって、またより大きくはドイツの占領統治体制にとって重大な危機要因となる。親衛隊ライヒ指

導者・ドイツ警察長官ヒムラーとライヒ保安本部の鎮圧作戦は、ドイツにとつての総力戦の深刻化、敗退化とともにますます過激化し、生け贄ユダヤ人を絶滅収容所に送りこむ全機構が新しいエネルギーを得て、フル回転するのだと言えよう。

第四に、歴史科学の方法としての合理性（事実と論理の連関を科学的実証的に解きほぐし、歴史現象を立体的に内在的に理解すること）と、ホロコーストが「合理性」を持つていたと主張することは別である。本書を通じて目指したことは、ホロコーストの弁護論や誤った合理化を批判することである。

最後に、ヒトラーの「絶滅命令」をめぐる歴史科学的な論争的検討を通じて、すなわち具体的な史料の提示と歴史像の検証を通じて、欧米や日本の研究者相互間で個々の点で史料解釈や議論が対立し、歴史像が混乱しているように見えても、その背後にホロコーストの事実と問題群が厳然として浮かび上がる。本書で行った検討の全体を通して否定しようのない事実群・史料群、ホロコーストの現実と論理、ホロコーストを推し進める総力戦下の深刻な要因群が確認できると思われる。実はそのことこそが一番大切なことである。それこそが、ホロコーストを忘却の大河に棹さ(7)して否定し去ろうとする議論に真に対抗するものとなることを期待している。

目次

序——問題の限定	3
第1章 ヒトラーの「絶滅命令」とホロコースト——研究史概観……………	11
はじめに	11
1 一九四二年八月前半説とその問題点	13
2 一九四二年九月下旬説から一九四一年二月二日説まで	23
3 戦時政治力学とユダヤ人抹殺の拡大——地域研究の進展と問題点	31
おわりに	36
第2章 独ソ戦の展開・世界大戦化とホロコーストの力学	
——「東方への移送」政策から世界大戦化による絶滅収容所への「移送」へ……………	39
はじめに	39
1 方法の検討と課題の設定——総体的連関とダイナミズムの把握	41
2 「早まった勝利の熱狂」下の戦後移送計画	55
3 「冬の危機」・対米宣戦布告とポーランド・西欧ユダヤ人の虐殺	69
おわりに	78

第3章 「絶滅命令」に関する史料批判と史料発掘の意義

はじめに 79

1 ヘース証言の意義と問題性 80

2 アイヒマン証言の信憑性の検証 86

3 ヒトラーのヨーロッパ・ユダヤ人「絶滅命令」——「一九四二年二月二日」説 92

4 ソ連におけるアインザッツグルッペの活動と一九四二年八月以降のユダヤ人抹殺の拡大
おわりに 115

第4章 一時回避的移送政策とウッチ・ゲットー問題

——移送政策再開から絶滅政策への転換期としての一九四一年一〇月

はじめに 117

1 ユダヤ人の東方移送——「フューラーの希望」 120

2 ウッチ・ゲットーの実態——一九四二年九月ヴェンツキ報告の段階 129

3 ヒムラー、ハイドリヒの強行突破策とヒトラーの承認——自動車排気ガスによる「安楽死」抹殺へ
おわりに 152

第5章 部分疎開政策とガス自動車「安楽死」作戦——ヘウムノ

はじめに 155

1 ソ連占領地ユダヤ人殺戮の無差別化と「安楽死」技術転用の検討開始——一九四二年八月中旬 157

2 ガス自動車開発とソ連占領地への投入——配備開始一九四二年二月末 161

3 西ヨーロッパ各地の不穏状態とユダヤ人東方移送への圧力群 167

おわりに——総督府問題の深刻化 171

第6章 総力戦の圧力群と総督府におけるホロコースト

はじめに 173

1 総督府におけるユダヤ人移送要請Ⅱ排出圧力とブレ・ラインハルト作戦 174

2 大々の移送強行政策の決定とヴァンゼー会議 182

3 ラインハルト作戦加速化の圧力群 189

おわりに 204

第7章 ヴァンゼー会議からポスト・ラインハルト作戦まで

はじめに 207

1 会議の重要な確認事項と論点——難問としての混血児問題 209

2 敗退の断末魔とハンガリー・ユダヤ人の運命 217

終章 アウシュヴィッツ否定論の潮流とその批判

はじめに 225

1 証言の信憑性問題におけるダブル・スタンダード 229

2 政治宣伝・裁判闘争の武器としての「アウシュヴィッツの嘘」 230

3 否定論の似非科学的手法 232

おわりに 236

第1章 ヒトラーの「絶滅命令」とホロコースト——研究史概観

はじめに

ナチ体制やホロコーストをめぐる問題は多岐にわたり、さまざまな議論が展開されてきた。たとえばナチ体制とスターリン体制を同一視するだけでなく、ナチ体制に先行するものとしてスターリン体制と強制収容所体制を規定したノルテの爆弾講演をきっかけとして噴出した「歴史家論争」⁽¹⁾は、八〇年代半ばから九〇年代にかけての一大論争だった。それは、ナチスのユダヤ人絶滅政策を唯一無比と見るか、比較可能なものをめぐる論争でもあった。また一九九六年春刊行のゴールドハーゲン著「ヒトラーの自発的死刑執行人——普通のドイツ人とホロコースト」⁽³⁾は、ルター「ユダヤ人とユダヤ人の嘘」以来、「四〇〇年にわたって普通のドイツ人の中に蓄積された排除的絶滅的なユダヤ人憎悪」なるドグマで戦時下の残酷なユダヤ人抹殺行動を説明し、その単純で単線的な歴史解釈が、世界的批判を巻き起こした。⁽⁴⁾

さらにナチの残酷性との対比で、これまで神話で守られてきた国防軍の問題もある。この問題に火をつけたのが、一九九五年三月にハンブルクから始まった移動写真展「絶滅戦争——国防軍の犯罪一九四一—一九四四」だった。それは、第二次大戦後に元将軍や元将校が広めた「清潔な国防軍」の伝説に打撃を与え、ネオナチのデモや妨害行動、保守政治家の問題発言を喚起した。写真の真贋や誰がどのような目的で撮った写真なのか、ドイツ国防軍の犯罪の証